掛川への交通ご案内

新幹線での所要時間

東名高速道路での所要時間（約80km走行での時間）

大手門駐車場・大型車6台・普通車201台

掛川城へのご案内〈掛川駅から徒歩7分〉

入館のご案内

■ 開館時間　午前9時から午後5時まで（入館は4時30分まで）
年中無休

■ 入 館 料

区　分	個　人	団体 （20名以上1人につき）
一　　般	410円	320円
小・中学生	150円	120円

上記料金で天守閣、御殿の2ヵ所へ入館できます。

掛川城公園管理事務所

〒436-0079　静岡県掛川市掛川1138-24
TEL（0537）22-1146　FAX（0537）23-1099

VEGETABLE OIL INK

日本で初めて木造天守閣を復元

掛川城天守閣

大名の暮らしを偲ばせる城郭御殿

掛川城御殿

掛川城の歴史

戦国武将たちの覇権争いの中で

掛川城より東に500mほどのところにあった掛川古城は、戦国時代の明応6(1497)年から文亀元(1501)年の間に、駿河の守護大名今川氏が遠江支配の拠点として重臣朝比奈泰熙に築かせたといわれています。

その後、遠江における今川氏の勢力拡大に伴い、掛川古城では手狭となり、永正9(1512)年から10(1513)年頃に現在の地に掛川城が築かれました。

永禄3(1560)年桶狭間の戦で今川義元が織田信長に討たれると、永禄11(1568)年義元の子氏真は甲斐の武田氏に駿河を追われ、掛川城に立て籠もりました。翌年、徳川家康は、掛川城を攻め長期にわたる攻防の末、和睦により開城させました。家康領有後、重臣石川家成が入城し、武田氏侵攻に対する防御の拠点となりました。

天正18(1590)年全国平定を達成した豊臣秀吉は、徳川家康を関東へ移すと、家康の旧領地に秀吉配下の大名を配置し、掛川城には山内一豊が入りました。一豊は城の拡張や城下の整備を行うとともに、掛川城に初めて天守閣をつくりました。

石落し■ 天守台の張り出し部に設けられ、石を落としたり、槍を突き出したりして、石垣を登ってくる敵を攻撃する施設。

霧噴き井戸■ 永禄11(1568)年から12(1569)年徳川家康は、今川氏真が立て籠もる掛川城を攻めました。この時、井戸から立ち込めた霧が城を包み、家康軍の攻撃から城を守ったという伝説があります。

「東海の名城」を揺るがした大地震

江戸時代の掛川城は、東西約1,400m、南北約600mに及び、徳川家康の異父弟の松平定勝や子、江戸城を築いた太田道灌の子孫太田氏など譜代大名の居城として栄えました。

貴族的な外観をもつ天守閣の美しさは「東海の名城」と謳われました。しかし、嘉永7(安政元、1854)年安政の東海大地震により天守閣など大半が損壊し、御殿、太鼓櫓、潞の門などの一部を除き、再建されることなく明治維新を迎え、明治2(1869)年廃城となりました。

その後、御殿は様々に使用されながら残りましたが、天守台や本丸の跡など一帯は公園とされてきました。掛川市民の熱意と努力が実を結び、天守閣は平成6年に140年ぶりに木造で再建され、ふたたび美しい姿を現しました。

掛川城天守閣

見性院肖像画

山内一豊肖像画「(財) 土佐山内家宝物資料館所蔵」

掛川城天守閣の特徴

掛川城天守閣は、外観3層、内部4階から成ります。6間×5間(約12m×10m)の天守閣本体は、決して大きなものではありませんが、東西に張り出し部を設けたり、入口に付櫓を設けたりして外観を大きく複雑に見せています。1階、2階に比べ4階の望楼部が極端に小さいのは、殿舎の上に物見のための望楼を載せた出現期の天守閣のなごりといえます。白漆喰塗り籠めの真白な外容は、京都聚楽第の建物に、黒塗りの廻縁・高欄は大坂城天守閣にならったと考えられます。

狭間■ 城郭内の建物や塀に設けられた穴で、内側から鉄砲や弓矢で攻撃するための施設。

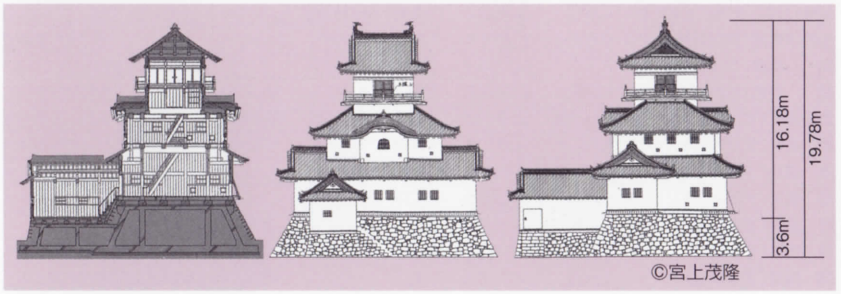
軒唐破風と火燈窓■ 破風とは、軒の三角形部分をさし、掛川城天守閣に用いられているものは寺社建築に起源をもち、唐破風と呼ばれます。火燈窓は、鎌倉時代以降に禅宗寺院の建築に用いられた窓の型式。ともに城郭の装飾として用いられるようになりました。

■概要

天　　守／瓦葺、3層、内部4階(地上2階、塔屋2階)
外部白漆喰塗籠、4階出入口引分け戸と廻縁・高欄は黒塗。
内部壁嵌板、4階は貼付壁、格天井
棟高石垣上端より53.4尺(16.18m)

付　　櫓／瓦葺、1層1階、外部白漆喰塗籠、内部壁嵌板、一部漆喰真壁
棟高石垣上端より18.75尺(5.68m)

総床面積／92.25坪(304.96㎡)



©宮上茂隆

掛川城御殿

■概要
木造瓦葺平屋
外　部／下見板張り
　　漆喰真壁
内　部／諸役所中塗
　　御書院黄色壁塗
　　小書院白漆喰塗
総床面積／947㎡(287坪)
　　創建当時1,091㎡(330坪)

掛川城二の丸御殿内部(創建当時)

※井戸
※かまど
※台所
※割場
※厠
足軽目付
徒目付
吟味奉行
張役所
賄方
御文庫
御文証
大目付
長囲炉裏の間
次の間
御用人部屋
御談の間
小書院
二の間
三の間
広間
御書院上の間
(大書院)
次の間
玄関
※蔵
※厠
※厠

※印は現存しません

©日本の城
(西ケ谷恭弘・香川元太郎)
理工学社

御書院上の間　床の間と脇■　御書院は城主の対面所で、上の間はその主室にあたる。框を入れ畳を敷いた床の間と、脇には違い棚が設けられている。右手には付書院を略した障子窓がある。

掛川城御殿の歴史

現存する数少ない城郭御殿

御殿は、儀式・公式対面などの藩の公的式典の場、藩主の公邸、藩内の政務をつかさどる役所という3つの機能を合わせもった施設です。掛川城御殿は、二の丸に建てられた江戸時代後期の建物で、現存する城郭御殿としては、京都二条城など全国でも4カ所しかない貴重な建築物です。

書院造と呼ばれる建築様式で、畳を敷きつめた多くの 部屋が連なり、各部屋は襖によって仕切られています。当初は、本丸にも御殿がつくられましたが、老朽化したり災害にあって、二の丸に移りました。

嘉永7(安政元、1854)年、安政の東海大地震で御殿が倒壊したため、時の城主太田資功によって安政2(1855)年から文久元(1861)年にかけて再建されたのが現在の御殿で、明治元(1868)年までの間、掛川藩で使われました。

駿河遠江など70万石の大名として徳川亀之助(家達)が江戸から駿府に移ってくると掛川にも旧幕臣が移り住み、御殿は勤番所と学問所に使用されました。

廃藩置県とともに掛川宿に無償で下付されて聚学所となり、その後も、女学校、掛川町役場、掛川市役所、農協、消防署などに使用されてきました。

その後、江戸時代の藩の政治や大名の生活が偲ばれる貴重な建物として、昭和47(1972)年から昭和50(1975)年まで保存修理が実施され、昭和55(1980)年1月26日、国の重要文化財に指定されました。

掛川城御殿の構造

掛川城御殿は、7棟よりなる書院造で、部屋はそれぞれの用途に応じ約20部屋に分かれています。

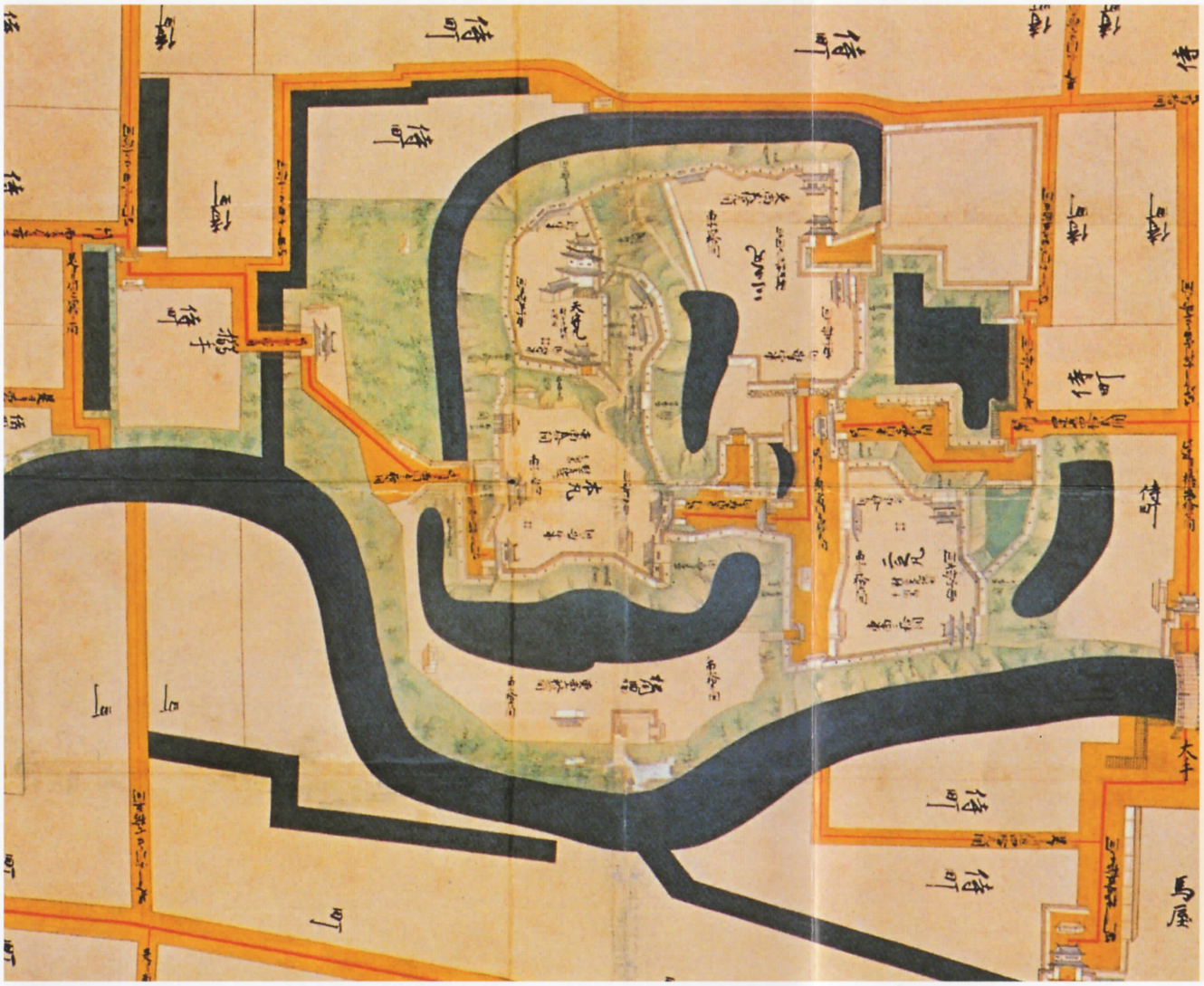
最も重要な対面儀式が行われる書院棟は、主室の御書院上の間と、謁見者の控える次の間・三の間から成ります。藩主の公邸の小書院棟は、藩主の執務室である小書院と、藩主の居間として使われた長囲炉裏の間から成ります。東側は藩政をつかさどる諸役所の建物で、目付・奉行などの役職の部屋、警護の詰所、帳簿付けの賄方、書類の倉庫である御文証などがあります。小書院棟の北側には、勝手台所がありましたが、明治時代に撤去されてしまいました。

江戸時代には身分によって入口が異なっており、藩主や家老は式台玄関から、その他の武士は玄関東側から、足軽は北側の土間から入りました。

玄関屋根の起り破風と蕪懸魚■　破風とは、軒の三角形部分をさし、破風板が上方に凸形に反ったものを起り破風という。棟木の端を隠す飾りが懸魚で、掛川城御殿のものは蕪懸魚と呼ばれる。

長囲炉裏の間・天井■
太田家正紋の桔梗紋と替紋の鏑矢紋

正保城絵図と掛川城



掛川城の整備において、発掘調査などとともに重要な資料とされたのが正保城絵図です。

正保元(1644)年、徳川幕府は全国の城郭の状況を把握するため、諸大名に城絵図の提出を命じました。これが正保城絵図と呼ばれるもので、63城の絵図が残されています。

正保城絵図に描かれた掛川城は、中央の天守丸と本丸の周囲を三日月堀・十露盤堀・松尾池などの堀が囲み、堀の外側に二之丸・三之丸などの郭が配置されています。これらの郭を堀が囲み、堀の外側に家臣の屋敷が配置され、またその外側を堀が囲んでいて、中心部が厳重に守られている様子がわかります。

正保城絵図に描かれた登城路や三日月堀、十露盤堀などが発掘調査で明らかになり、整備に活かされました。

城の南側に外堀の役目を担う逆川が流れ、逆川の南側には総堀に囲まれた城下町が広がっています。城下町の中央を江戸と京都を結ぶ東海道が東西に通っています。

譜代大名が城主を務め、堅固な造りで東海道に面する掛川城は、将軍の上洛などの時の宿泊所としての役割も果たしました。

徳川家康は、慶長19(1614)年の大坂冬の陣に際し、駿府を出発して掛川城に泊まっています。第2代将軍秀忠は、元和3(1617)年の上洛の時など掛川城に泊まっています。第3代将軍家光は、寛永11(1634)年の上洛の時に掛川城に泊まっています。第14代将軍家茂は、慶応元(1865)年の第二次長州征討に向かう途中に掛川城で宿泊しています。

掛川城歴代城主

「寛政重修諸家譜」により作成

●城主名	●禄高	●入城年	●西暦	●在城年数	●摘要
朝比奈泰凞(やすひろ)		文明初年			今川義忠の命により築城
同　泰能(やすよし)		永正10年	1513	45	
同　泰朝(やすとも)		弘治 3年	1557	12	今川氏真と共に小田原へ転退
石川家成(いえなり)		永禄12年	1569	11	
同　康通(やすみち)		天正 8年	1580	10	
山内一豊(かつとよ)	5万石	天正18年	1590	10	関ヶ原役の恩賞により土佐高知へ転封
松平(久松) 定勝(さだかつ)	3万石	慶長 6年	1601	6	家康の異父弟
同　定行(さだゆき)	3万石	慶長12年	1607	10	
安藤直次(なおつぐ)	2.8万石	元和 3年	1617	2	紀伊徳川頼宣付家老
松平(久松)定綱(さだつな)	3万石	元和 5年	1619	4	
中野重吉		元和 9年	1623	2	中泉代官、預り
朝倉宣正(のぶまさ)	2.6万石	寛永 2年	1625	6	駿河徳川忠長付家老
高室昌重		寛永 9年	1632	1	中泉代官、預り
青山幸成(よしなり、ゆきなり)	2.6万石	寛永10年	1633	2	
松平(桜井) 忠重(ただしげ)	4万石	寛永12年	1635	4	
同　忠俱(ただとも)	4万石	寛永16年	1639	0	幼少につき即日転封
本多忠義(ただよし)	7万石	寛永16年	1639	5	
松平(藤井) 忠晴(ただはる)	3万石	正保元年	1644	4	

●城主名	●禄高	●入城年	●西暦	●在城年数	●摘要
北条氏重(うじしげ)	3万石	慶安元年	1648	10	
宮崎道次		万治元年	1658		川井代官、預り
本多利長					横須賀城主、城番
井伊直好(なおよし)	3.5万石	万治 2年	1659	13	
同　直武(なおたけ)	3.5万石	寛文12年	1672	22	
同　直朝(なおとも)	3.5万石	元禄 7年	1694	11	発狂、養子直矩襲封
同　直矩(なおのり)		宝永 2年	1705	0	
松平(桜井) 忠喬(ただたか)	4万石	宝永 3年	1706	5	
小笠原長淵(ながひろ)	6万石	正徳元年	1711	28	
同　長庸(ながつね)	6万石	元文 4年	1739	5	
同　長恭(ながゆき)	6万石	延享元年	1744	2	幼少及び領政不備により転封
太田資俊(すけとし)	5万石	延享 3年	1746	17	寺社奉行
同　資愛(すけちか)	5万石	宝歴13年	1763	42	寺社奉行、若年寄、京都所司代、老中
同　資順(すけのぶ)	5万石	文化 2年	1805	3	
同　資言(すけとき)	5万石	文化 5年	1808	2	
同　資始(すけもと)	5万石	文化 7年	1810	31	養子、堀田正穀3男、老中
同　資功(すけかつ)	5万石	天保12年	1841	21	寺社奉行
同　資美(すけよし)	5万石	文久 2年	1862	6	明治2年 上総国芝山に移る